

日本をキリストへ 協力

「日本をキリストへ」
伝道団体連絡協議会

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1

TEL 03-3296-1001

教会と伝道団体

伝道団体連絡協議会顧問

岡村 又男

戦後五十年を迎え、教会の歩みもさまざまな面から検討され、二十一世紀に向かって、その使命の重要性が新たに問われています。各種伝道団体の働きは、日本の教会の成長にと

っては重要な役割を果たしてきました。各伝道団体は、宣教師によって始められたもの、個人から、教会から、あるムーブメントからと、発生と成立はさまざまですが、一つ一つが、その歴史の中で今の時代の働きとして整えられてきました。

教会の外にある働きではなくて、主の教会の働きと信じます。具体的な地域教会との協力については、各伝道団体は、地域教会の現実をよく理解し、働きを十分理解してもらおうように努力すること、地域教会が求めているものを正しく把握することが大切でしょう。地域教会は、伝道団体のそれぞれの重要性を知っていても、具体的な経済的問題、人的協力については限度があることを伝道団体は理解しなければなりません。教会も世界宣教のビジョンの中で、個々の教会、教団を越えた働きのために祈り献げる積極的な姿勢が大切です。教会の関心がより多く集まり、祈りに支えられて、まさにパラチャーチの働きが進められます。

伝道団体に望むこと。

一 個々の教会にとって、今日は伝道・牧会の分野におい

て複雑多岐にわたる時代であって、その専門性が問われます。伝道団体が、専門分野のプロとして磨きをかけ、その働きの内容についてよく知らせ、それを教会に提供していくことが求められています。

二 福音派の教会にとっては、いつも聖書信仰が問われ、聖書を基盤とした働きでないと協力できないという堅い姿勢があります。そういう意味においてお互いに信仰の基盤を明確にした上での協力が大切になってきます。

三 正しい教会観と言う場合に、地域教会を中心として、伝道団体は教会に仕えるものであるという考え方もあります。このような理解の中には、地域教会主義、教派中心主義になりやすい場合があります。反対に、伝道団体が中心にあって、地域教会が協力すべきということも正しくありません。

伝道団体に働く一人一人も、地域教会に属し主日礼拝を中心に教会の奉仕に励んでいます。主の教会は一つです。その上で伝道団体の働きは、教会の働きの多様性の重要な一部分を担っているのであって、教会と対等とか、対立する関係ではなく、主の教会の働きとして認められ、地域教会との協力関係が築かれていかなければなりません。地域教会の牧師、役員会の知らないところで、教会員に直接働きかけられ、特にその教会で賛成してない働きの場合に、教会に混乱を起こす場合もあります。互いに教会の正しい理解をもって、その協力が築かれていくことが望まれます。

「伝道団体連絡協議会」が設立十年を迎えました。相互の協力を密にしてこの時代に求められている専門分野の働きを通して、世界宣教の使命が果たされることを切に願うものです。

太平洋放送教会

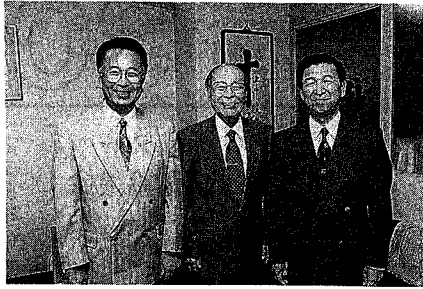
〈事務所〉〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1 OCCビル

☎03-3295-4921

FAX03-3233-2650

ラジオ・テレビの電波を通し、一億二千万の同胞及び海外の日本人・日系人の魂の救いのため、全国的、世界的視野に立って働きが進められています。一九五一年六名の宣教師により、太平洋東洋放送協会が誕生、太平洋放送協会の前進となる。五四年羽鳥明理事長に就任。六〇年財団法人認可。八三年世田谷区梅ヶ丘より、お茶の水クリスチャン・センタービル内に事務所、スタジオを新設し移転。ラジオ「世の光」番組は全国二十五の民放局より放送、テレビ「ライフ・ライン」番組は国内九局より、「太平洋の声」短波放送が放送されています。

世田谷の民家の二室を借り受け、放送伝道が開始された小さなスタートが、四十余年の今日ラジオ・テレビ番組によって、ほぼ一〇〇%日本全土を覆うに至りました。



九四年四月羽鳥明会長、村上宣道理事長、榊原寛常務理事（写真）による新体制がスタートしました。九五年三月終了のPBA三ヶ年計画の成果を踏まえて、四月よりメディア伝道推進委員会が新設されます。委員長は鈴木留蔵氏他クリスチャン実業家、社会人として各分野で活躍している八名余の委員で構成。他に女性委員会が組織され、PBAの諸計画に具体的に係りつつ、協力及び支援をしていくことになりました。激変多様化する将来を見据えて、更に伝道ネットワークの拡張、教会との協力態勢をより強化し拡充を目指しています。

ディアコニア・センター

〈事務所〉〒285 千葉県佐倉市栄町7-17 2F

☎043-484-1807

FAX043-485-3232

四十年前から日本での宣教を開始し、教会を設立してきたノルウェー・ミッションナリー・ライアンスは「ディアコニア・ミッション」とも呼ばれています。日本の教会の中で超教派的にそのディアコニア（奉仕）を実践し、広めるために一九九〇年千葉県佐倉市にディアコニア・センターを開設しました。

◎働きの内容

一 現在はスタッフの賜物と経験を生かして、教会関係やその知人の方々の中で主として次のような問題を持つ人々のために、相談・カウンセリングなどの精神的な援助を提供しています。

①アルコールや薬物依存症問題 ②不登校（登校拒否）問題 ③妊娠中絶・養子・養育問題 ④その他、精神的な問題 ⑤「キリスト者の成長十二ステップ」活動 ⑥これらの問題に関するセミナー（写真）やコンサルタント。

二 礼拝メッセージ、伝道集会、聖書研究などの奉仕

◎ヴィジョン

①会員とボランティアの協力による働きの分野（レパートリー）の拡大と充実。 ②伝道と教会のためにディアコニア（奉仕・援助活動）が日本の教会の中で確立されること。 ③ディアコニア活動が日本の教会の働きとして自立すること。



日本リバイバルミッション

〈事務所〉〒44113 愛知県新城市富沢407-1

☎05362-3-6712

FAX05362-3-6220

一九九三年に開催された全日本リバイバル甲子園ミッションを機に、日本リバイバルクルセードを発展的に解消し、一九九四年「全日本リバイバルミッション」としてスタートしました。ひたすら、日本のリバイバルを願う左記のような働きをしています。

1 リバイバルの拡大を願ひ、各地で「リバイバル・ミッション」を開催します。

地域教会のご協力を仰ぎ、今年には日本海ミッション、北海道ミッション、信州ミッション、四国ミッションが開催されます。

2 祈りの運動。

祈りの勇士による祈りの運動を展開しています。現在、百万時間を目標に、祈りを積み上げています。祈りによる推進の徹底こそ、リバイバル実現への道と確信しています。

3 リバイバルミッションニュース誌の発行。リバイバル情報を満載にして、最新のリバイバル情報を伝達します。

4 リバイバル拡大聖会。

内外からのリバイバリストをお招きして聖会や賛美歌集会を企画し、実施します。

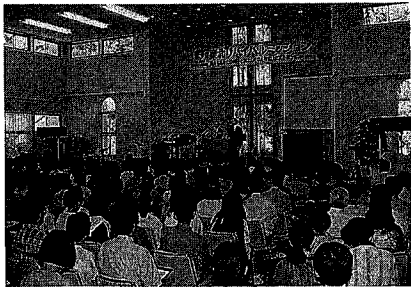
5 リバイバル聖書学校。

リバイバル時に用いられる器を養成します。

〈大阪事務所〉〒550 大阪市西区江之子島1

1-9-420、☎06-448-5910、

FAX06-448-5914



4月18日(火)

第11回総会 創立10周年記念講演会

のご案内

・ 総会 議事／活動・会計報告、活動予定・予算案審議等

・ 時間・場所／午後四時～五時三十分、OCC4F

・ 創立十周年記念講演会

・ 講師／本田弘慈師、岡村又男師

・ 賛美／岩渕まこと氏

・ 時間・場所／午後六時三十分～八時三十分 OCC8F

* 二十一世紀に向かっての日本における伝道団体の使命を確認し、新しいチャレンジをいただく時ですので、各団体のスタッフの研修の時として積極的にとらえていただき、多くのスタッフをお送りくださるようお願いいたします。

〔四頁よりつづく〕

には、互いにそこまでしか到達しえなかったことを認め、しかしその制限の中で主は働いておられたことを覚えるためです。さらには、互いを主が立てられたものとして受け入れあい、感謝を覚えるようになるためです。主の世界宣教のみどころを知って、その一部分としての自らの役割を認識するようになるためです。

パウロは競争心から福音宣教をする人々があることにふれ、伝道の歴史においてそういう段階がありうることを認めました。しかし、その手紙を書いたピリピの教会の人には一つとなるように懇願したのです(ピリピ一章)。主はさらに質の高い成熟した関係を持つように望んでおられると信じます。宣べ伝えておきながら、その一方でその使信を否定することにならないためにです。

つづく

地域教会と超教派伝道団体

⑤

キリスト者学生会総主事 片岡 伸光

ともに奮闘するものとして

私たちが、地域教会とパラチャーチといわれる超教派伝道団体の関係のあり方を考えるとき、今直面する問題だけではなく、その根元にある両者の関係の歴史をふりかえる必要を覚えます。少なくともプロテスタントの伝道においては、その始めから伝道団体と地域教会の関係をめぐる問題がありましたし、いまなお十分にその問題を克服しえていないことを思わざるをえないからです。戦後始められた働きにおいてはその傾向はさらに強いといわざるを得ません。

日本の伝道はほとんどの場合、外国からの宣教師たちによって始められました。宣教師たちは、一地域教会から派遣されるという場合もありましたが、多くは一地域教会の規模をはるかに越えた規模の海外宣教師団体を通じて派遣されてきました。ここで考えるべきことは、伝道団体はその初期の活動においては、福音をまだ聞いたことのない人に宣べ伝えることに関心をはらい、信じた人たちからなる地域教会の形成にはあまり目を向けられなかったことです。しかし、宣教地である日本の伝道は、キリスト信仰に同意し信仰者になる決心をしたときからの方が、取り組むべきことが圧倒的に多いのが実情です。

現在の伝道団体は、その歴史の中で、このことを理解し、もう少し息長い教育的なプログラムを取り入れているようになったものが多いように思います。しかし、それはまた、地域教会との境界をあいまいにし、あらたな問題を引き起こす可能性をはらんでいたたりします。

今年には戦後五十年の年です。戦後新たに派遣されてきた宣教師・宣教師により始められた教会もそれだけの歴史を経て今に至っています。宣教師主導の時代から、日本人牧師が養成され立てられた時代、教会堂が建てられ教会が経済的に自立していった時代を通りました。今は日本の教会により、新たな教会開拓のわがが進められるほどになってきました。この間に、超教派的な伝道協力も種々にわたり進められてきました。その多くの場合が、一地域教会の規模をはるかに上回る大きな影響力をもつ伝道団体の主導によって始められました。協力伝道のわがが、教会と教会の協力を生み出したことは、地域を越えた働きの必要に気づき行動する機会を提供しただけではなく、主の福音にあって一つであるという教会本来の姿をある程度まで知覚させたのだと思います。その一方で、地域教会の成長度合いに比較して

急すぎる大きな活動への参加や、信徒の成熟を見る前の活動への投入は、教会の着実な成長にとつて必ずしも益とまらない場合もありました。伝道が一時のことではなく、日常的・生涯的なこととして取り組んでいる地域教会にとっては、息の長さが必要です。地域への浸透も、個々人の成長も含めた教会自体の成長も十年単位の時期を必要とするといわれます。他方、伝道の使命に立つ団体は、主の教えられた終末を意識して、短期間のうちに結果を求めます。こうした基本的な食い違いから始まって、両者の間には与えられた役割の違いからくる溝ができたとしても、五十年の歴史としては、ありうることと思います。

このような事情をあらためて文章にするのは、両者が主の御心になつたよりよい健全な関係になることを願うからです。私の見るところでは、表立って対立してはなくても、過去の歩みの中でおきた対立から自由にされたというよりは、反動的にそれぞれの考え方を固めていると思われることが見受けられるからです。反動の反動を繰り返すのではなく、本来の姿をかちとる必要がありません。過去をふりかえるのは、そこにあつた食い違いを認め、互いをゆるしあい、悔い改めて、きよめられて、ひとつ思いになるためです。その時代

三頁下段につづく

発行日	一九九五年三月十五日
発行者	羽鳥 明
編集者	鈴木 繁